



昭和55年度岩見沢分校卒業論文等概略

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9024

昭和55年度 岩見沢分校卒業論文等概略

「学校」教育系

- 教 育**
- 地域の変貌と教育
 - エドモントン市（カナダ・アルバータ州）における精神薄弱者の教育と福祉
 - 教育系学生の自治
 - 日本の「生涯教育」その課題と展望
 - 「宗教と教育」
 - 「発問」を考える
 - 文学作品における読み方指導過程
 - 日本の幼児教育の歴史と現状
 - 大正期芸術教育運動の研究（2編）
 - 授業の本質を考える
 - 「発見学習」について
 - 北海道の児童文学の課題

心 理 本年度は7編の論文。そのうち、実験的方法に基くものとして、リーダーシップの効果性、向社会的行動の発達、幼児の物語理解、大学生及び児童の文章表現力、などに関する研究が4編。質問紙等の調査による研究として、人格形成と同胞関係、出生順位と性格、学習意欲、などに関する論文が3編。今年度の卒論は、それぞれのテーマに従って努力しており、中にはかなりレベルの高いものがみられた。

「言語」教育系

国 語 今年度は、古典の領域では、古代の「万葉集」における抒情の発生の研究、中古の「無名草子」研究とともに近世文学の白眉滝沢馬琴「南総里見八犬伝」に関する研究が二つあった。なお近代文学では樋口一葉の文体に関する研究、梶井基次郎論、また宮本百合子研究があった。現代文学では川端康成、吉行淳之介に関する今日的な視点からの論考があった。なお児童文学に関しては、小川未明研究が一篇あり、総体的にはバランスの取れた卒業論文が提出された。

書 道 一般に書道は、過去の著名な書道家及び書道の歴史について卒業論文を作成します。本年度としては、作家としては嵯峨天皇、藤原行成、歴史では楷書の成立史、秦の書道史といったものです。

外国語 提出されたのは、英文で書かれた卒業論文二編。一編は限定詞 any と some の用法について一般的に受け入れられている定義を、収集した疑問文における使用例をもとに検討する。他の一編は、アメリカの作家による作品を取り上げ、その中で起こる一つの出来事を現代人の孤独な存在という視点から考察する。

「社会」教育系

歴 史 日本史関係は3編。近世の松前藩をテーマとしたもの、明治期の政策史、明治初期の思想史といった分野に関したものというところ。原史料にあたっての分析的な考察に及ぶ部分がようやく見えはじめて来ている。もうすこし時間をかけての労作が欲しい感あり。西洋史関係

も、イギリス近代政治史、19世紀ドイツの経済史および近代日本の形成をドイツとの関係で論じた、計3編。それぞれ、学界では蓄積のある分野だけに、研究史の整理と基本的事項の把握に時間を費やされ、原史料にもとづく実証的・分析的考察に欠けているのは残念である。学生諸君の努力もさることながら、大学として原史料を含む文献の整備が必要であることが痛感させられた。

- 地 理**
- 天売焼尻の地誌的研究
 - 本郷商店街の地理学的考察
 - 岩見沢市における住宅地形成に関する地理学的研究
 - 札幌市のバス交通に関する地理学的考察
 - 江別市の稲作農業に関する地理学的考察
 - 岩見沢地方の電話普及に関する地理学的考察

法 政 法律系においては、憲法規定と教育権或いは基本的人権とのかかわり、及び現在注目を集めている福祉と法律といった問題が、政治系においては、選挙における投票行動、及び政治に関する関心度等の問題が取り扱われた。

以上はいずれも小学校教員として、特に社会科教育の実際に当たって必要かつ適切な問題をとりあげていると言えよう。

社 経 今年度の卒論提出者は一名のみ。青少年の非行に及ぼすマス・メディアの影響の考察がテーマで、若干の実証的データにもとづいて種々の視角から検討を加えたもの。「非行」問題での卒論は毎年一本程はあり、ある水準に達しているが、今回は基礎資料の蒐集、理論的考察ともに今少しの感あり。この種の問題では、三年次目には計画をたて、幾分小規模でも実地の調査を介した分析が欲しいところ。経済学は、経済理論と政策に取り組んだものが多く、貿易理論・社会保障制度・税制と各国の政策及び金融政策の問題として各国金融とスタグフレーションの現状分析をしたものがあり、一般的にはわが国の研究が主体となっている。最近の傾向として研究テーマが年々広汎になり、専門分野としての研究の専門化が失われているのは遺憾にたえない。

哲 倫 本年度は8編。スタイルはいわゆる哲学科の論文に近いものになっていますが、内容的には今一つというところ。仏教、儒教、ベルグソンと個人の思想を含め、思想史関係がほとんどですが、テキストの消化が精いっぱいというところ。地味なテーマを着実にと思っていますが、なかなかうまくいかないようです。

「自然」教育系

数 学 幾何学ゼミナール……主として、ユークリッド空間での曲線論、曲面論を具体的演習により研究した。統計学ゼミナール……エントロピーについて研究し、応用例の解法を行った。代数学ゼミナール……群論、環論、イデアール論、体論の初歩的研究により、現代数学の基礎的理論を研究した。解析学ゼミナール……現代数学の語法と手法により、微分積分学を再構成する。古典的な微分積分学について十分に理解していることが必要である。

物 理 ゼミナールグループ（林先生）——物理現象を数理的に解明する方法を学習する。学習内容として、微分方程式・偏微分方程式・フェリー級数・ベッセル関数を使用して熱伝導現象・弾性振動らを解明する。

論文グループ(志尾先生) — 氷を試料にして物質の物性的性質を研究する。学習内容として物質の電氣的性質・多結晶体の變化・電氣的性質と物質の構造・雪結晶の生長を実験的に調べる。

化学 本年度は、植物に含まれるアミノ酸の分析と、錯体の電気化学的分析法についてという純化学的な実験を行ったもののほかに、Davyの電気化学に関する仕事を中心に化学史及び、化学教育と関連づける研究も行われました。前例もなく、資料探しにも苦労したようですが、このようなテーマが、今後もとり上げられるとよいと思います。

生物 近年の卒論のテーマは①魚類(グッピー)について毒物(亜硝酸)の催奇性を組織・細胞学的に研究する方向と、②大正池の植物プランクトンの季節遷移がどのようにして起るかを、フィールドでの観測と培養実験から追求する方向が主流となっています。今年度もこれらのそれぞれに2~3名のグループが取り組みました。

このほか、新たな方向を開拓する学生もいて、進化学教材がわが国で歴史的にどのように取扱われてきたかについて、また②に関連して、動物プランクトンの分類についての卒論が出て来ました。

最近では教員採用登録試験が難しくなったせいか、この試験が終わるまでは研究に集中できない気分があるようで、このことが卒論の成果にも影響しているように思われます。

地学 今回は、勇払郡厚真町北方~北東方域の地質の解明を目的とした。野外調査と室内実験の結果、新第三系の堆積岩及び第四系の火山噴出物、段丘堆積物等の分布・層序・地質構造等の詳細が明らかになった。さらに、調査域東端部に蛇紋岩体が新たに発見され、肉眼観察、光学顕微鏡による観察およびX線回析により、造岩鉱物の特徴が明らかになった。これらは、5名の学生の共同研究により得られた成果である。

「芸術」教育系

音楽 本年度の学士論文も例年と同様、音楽史、作品論、音楽教材論等々テーマは多岐にわたっている。例をあげると下記の如くである。「ショパンのピアノ・ソナタ変ロ短調研究」「モーツァルトの宗教音楽」「シューマンの歌曲集：女の愛と生涯」「我国の小学校唱歌教材論」「ゲーテの詩ミニヨンによる五人の作曲家の歌曲」「ベートーヴェンのピアノ・ソナタ、作品57」ほか。

美術 9名の学生が絵画、彫塑、工芸のそれぞれの分野で卒業制作した。絵画、彫塑では具象と抽象の作品に分かれ、工芸では実用的なものとは立体造形的作品に分かれた。これらの作品は札幌の画廊で展示発表された。



油彩100号 高田 宏昭

「生活・健康」教育系

体 育 各種の基本運動に関するフィルムモーションによる動作分析が主であったが、その他、社会体育や運動生理学的な研究報告などもあった。なお今年は2～3人による共同研究が目立った。

技 術 機械・電気・栽培を中心とした専門分野の研究、教科教育にかかわる調査及び考察等が行われている。今年のテーマは、①北海道の学校園における調査・研究、②公共花壇の実態、③絶縁物中の電気伝導となっている。次に内容の一例を示します。

「小学校における8種類の学校園の実態・問題点・希望等をアンケート方式により86の小学校、53の教育委員会より回答を得て、そのデータを分析し、学校園の果たしている役割や今後の園のあり方に言及している。」

家 庭

- 乳幼児をもつ母親の働く条件
- 砂糖と食生活
- 日本人の体位と食生活の関係について
- 小学校家庭科教育における被服領域についての一考察
- 現代における人間性喪失についての一考察
- 19世紀における着装についての一考察
- 大学生における嗜好調査とその考察

人文・社会・自然諸科学の統合領域を対象とするため、衣・食・住生活からのアプローチのみならず、女性問題や現代社会（家庭）と人間といった観点から意欲的な論文が作成されました。

今年度は、さらに家庭科教育の教材研究を中心とした調査研究も加わり、これからの論文のあり方のひとつが示され、注目されました。